

極上性奴会

ごくじょうせいどかい



EARTHLIGHT



知るかよお!!

いちゃああ!!



極上性奴会



にしむらたかし



困りましたわね



こつも 毎回
膣内に射精されると



ほんとに妊娠して
しまいますわ



琴葉?!



不器用なヒトだ

なぜ…

家族の為とはいえ
藤原恒久と…

その…

あんなコトを…

琴葉…

覗き見とは
あまり趣味が
いいとは
いえませんわね

琴葉？

あなたは
聡明なヒトだ

そして

美人だ

登場人物



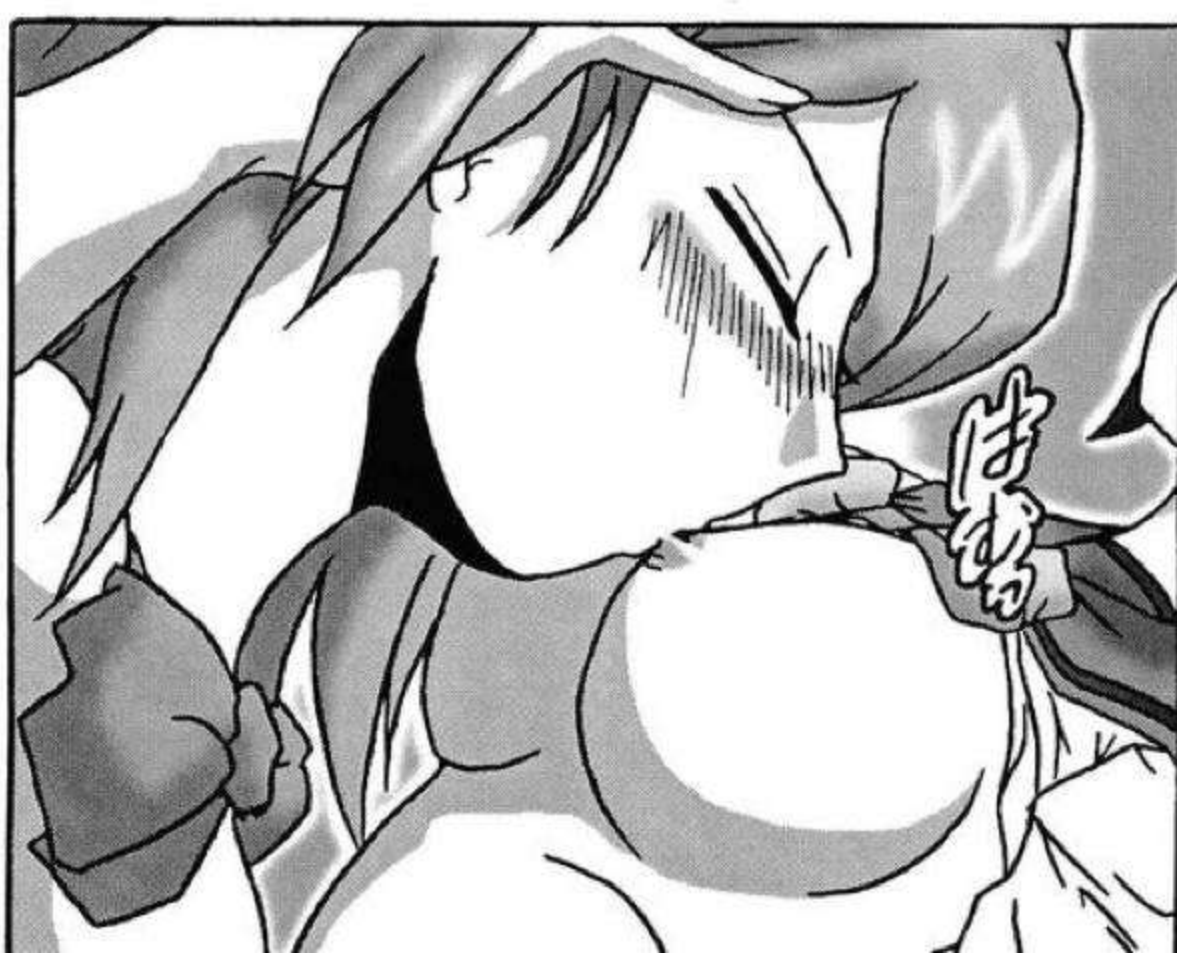
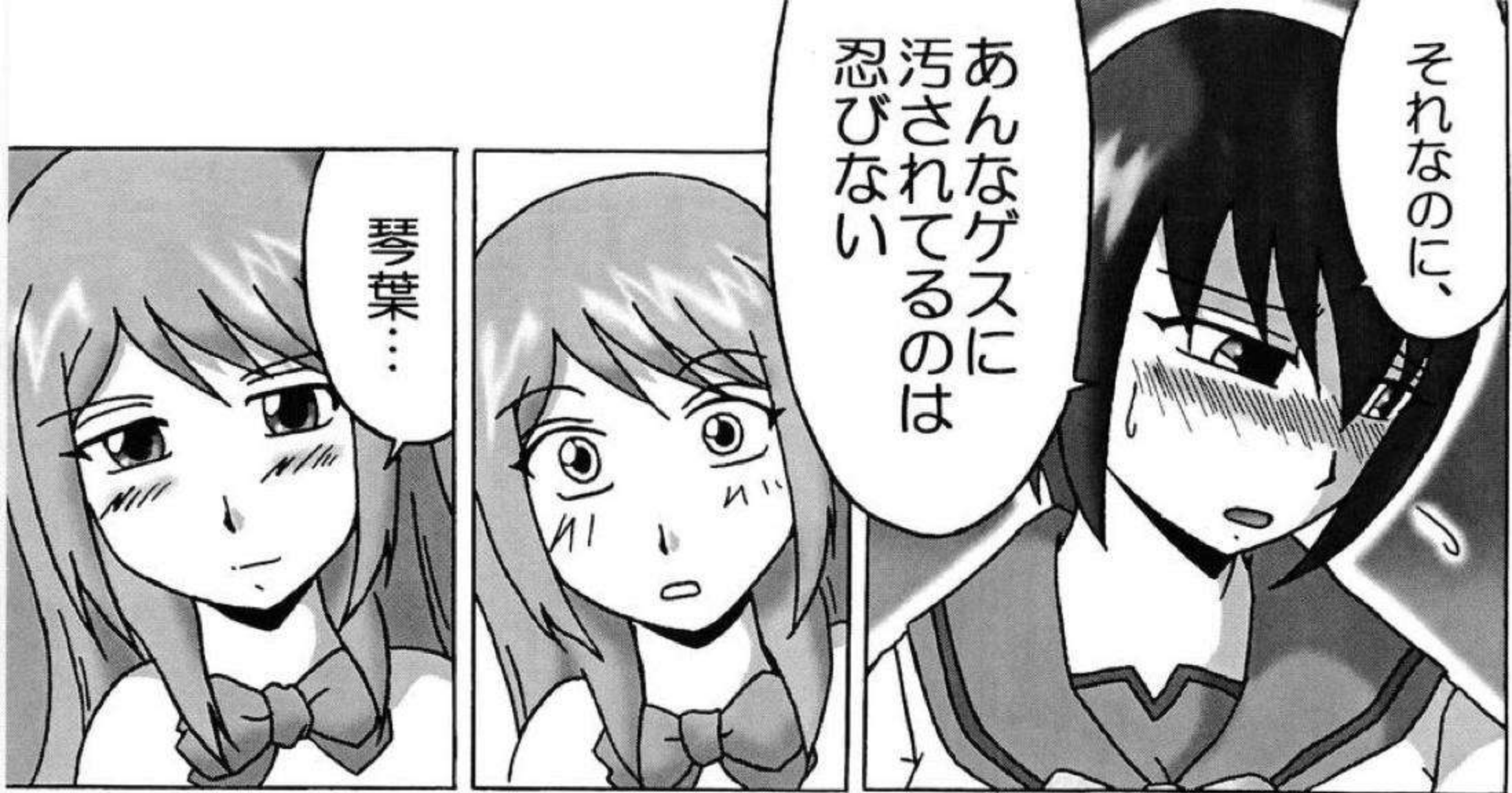
●銀河久遠 ●宮神学園3期生。やさしい王様を目指す。

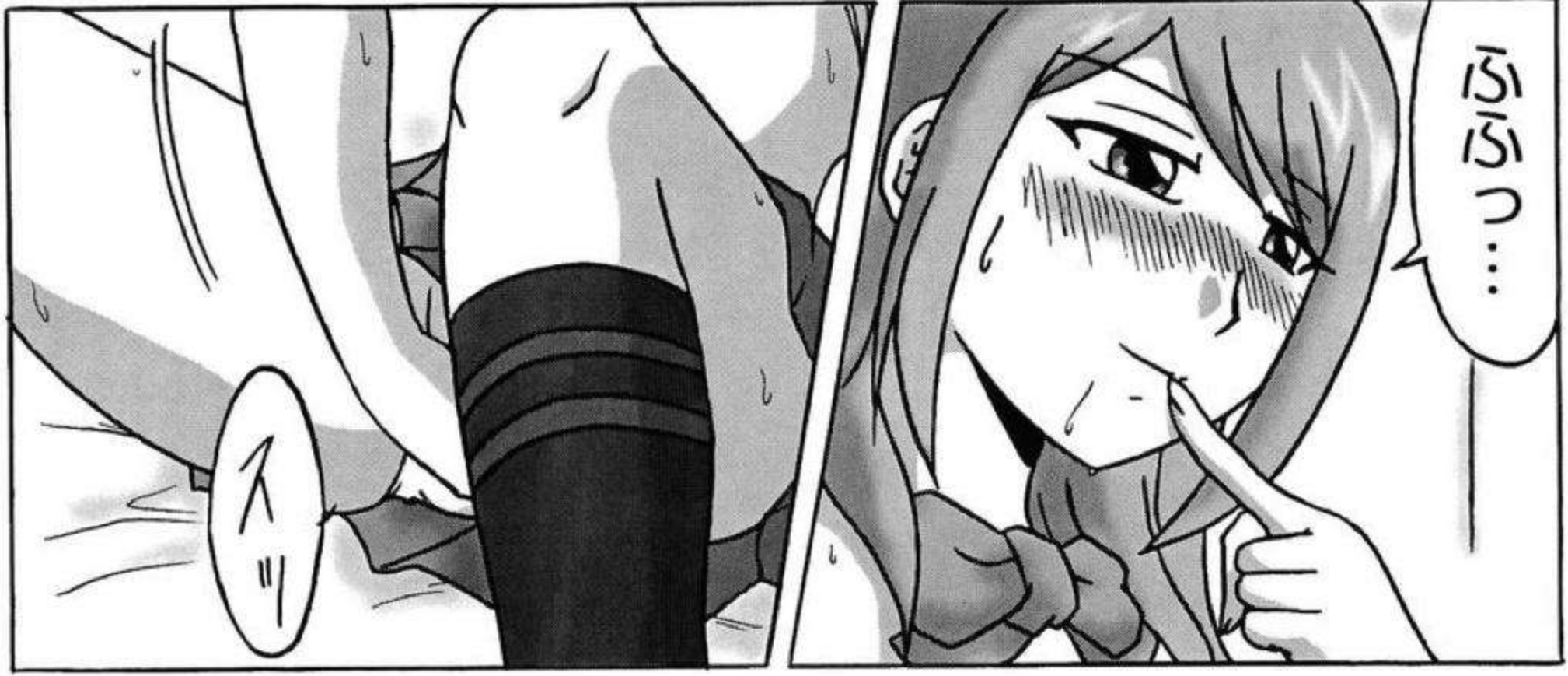


●矩継琴葉 ●宮神学園4期生。ゴミを木に変える能力を持つ。

琴葉?!









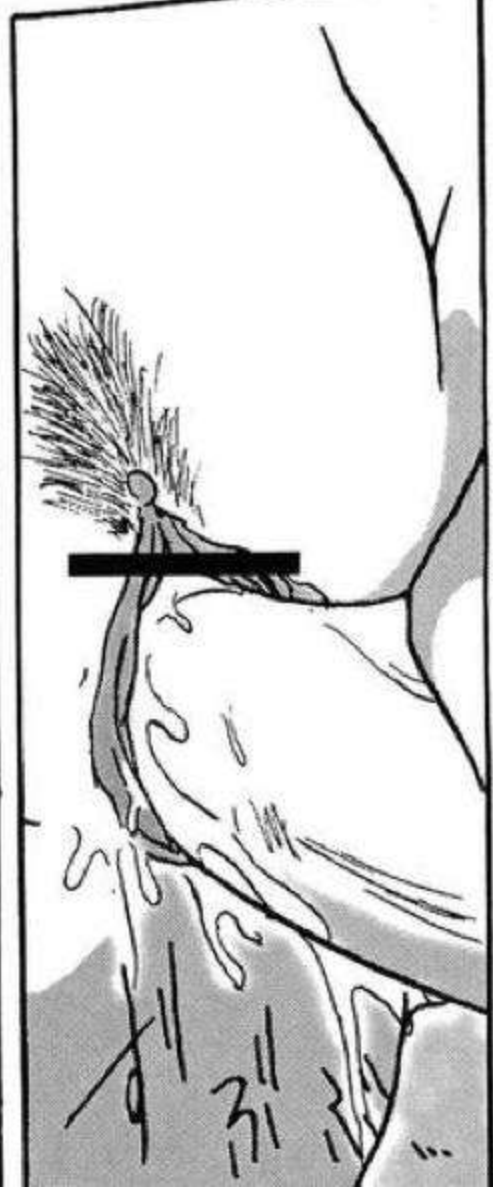
聖奈さん特製



プツチャンさん
& ランスさん
ですわ!



あ...



...こはあ



こまおすわよ



ちよ...待つ...







なんだかんだで
喜んでいたみたい
でしたけど？



少しだけ…

す…



これからも
楽しめそう
ですわね…

んんん…

おどろ

百合ユリでパヤパヤでおしま〜い。



はー
どうしよう
困ったなあー



そうだ！
あゆちゃんに
相談してみよう

あゆ
ちゃーん！！



なんやー？

私のこと
呼んだんかー？！



あゆむ
歩違い
だあー！！

あかーん

放課後でパヤパヤで支離滅裂で
管理人さんは出ない
何だ？このタイトルは
Orz



文：BAMI

絵：にしむらたかし

拝啓、ミスターポピット

宮神学園の生活はもうすっかり慣れて、沢山の友達に囲まれてとても楽しく生活しています。

この前なんかは忍者のお仕事を手伝ったんです。

忍者はちよつと恥ずかしいけど、とつても気持ちよくなってやめられなくなるようなお仕事でした。

忍者の人たちは拷問に耐える為にも練習するんだって、でもわからないことが一つあって……。

どうしてあんなに気持ちいいことが拷問になるのか私には全然わかりませんでした。

忍者で忍者、ドロン ドロン♪

今日もお友達と忍者の特訓です。

蘭堂りの

「しつれいします」

誰も使っていない放課後の教室。

ドアを開けるともう先客の顔があった。

「あ、りの」

「わ！みなもちゃん、今日は早いね」

先にいたみなもは腰をかけていた机から飛ぶように降りて

駆け寄ってきた。

「今日は一年生の授業が一時間なかったの、それで？桜梅さんは？」

「うん、今日はあゆちゃん、隠密の仕事が入ったからちよつと

遅れるって言ってたよ」

いつも教えてくれる先生は、今日は用事で遅くなることを告げた。

「ちえ、そうなんだ。 まあいいや……」
みなもはちよつと残念そうに頷いた。

「りの」

「へ？」

「私達だけでも修行しようよ♪」

みなもはりのが振り向いた瞬間にそのまま押し倒した。

「わきゃ☆」

ガツン

あまりの突然の出来事にりのはされるがままに押し倒されて頭を打ってしまった。

「みなもちゃん、痛いよ」

打った頭をさすりながら押し倒した本人を目で追おうとするが、小さな鳩と星が追いかけてっこしているのしか映らない。

「まだまだ、りのは修行がたりないなあ」

そう言いながらりのの上に乗ったみなもはそのまま制服とブラを一緒にまくりあげた。

「ひゃあ！ちよつと、みなもちゃん?!」



多少の揺れを見せながら小さな白い乳房があらわになった。

「むう、ちよつとだけどやっぱり私のより大きい……」

頬を膨らませながらもみなもはりのの乳房の先端をいじり始める。

「ほえ……ひゃん……ん」

目の前の鳩と星が消えてしまう位の快感にりのはただ吐息を漏らすことしか出来なかった。たちまちりの先端は自己主張をし始めてみなもに口に含まれてそのまま転がされていった。

「むう……ううう……」

長めの嗚咽と共にりのの体から力が抜けていってしまふ。

「もう、りのつたらずぐイツちゃうんだから……つまんないの」

胸を嘗め回していたみなもは顔を上げてまたちよつとすねた様な顔をした。

「ご……ごめんね、みなもちゃん」

上に乗っていたみなもはりのの上からどいて今度は机に腰をかけた。

「ねえ、りのの修行の成果も見せなさいよ」

脚を開いてたみなものスカートの中には下着は付いてなかった。きれいな割れ目が少しひらいて光っている。

「！……みなもちゃん、今日は下着をずっと着けてなかったの？」

りのは開いた脚の付け根にそつと手を伸ばした。みなもの白い脚をりのの手が一番敏感なところに向かって撫でるように向かっていく。

「だって、修行だもん。このくらいは……しないよね」

優しく焦らすような感覚に切なさを感じながら、みなもは熱い吐息をもらし始めた。

「みなもちゃんはすごいなあ。私はすぐ転んじゃうし、恥ずかしくてできないよ」

大事などころにはまだ触らずにわざと周りの太ももの付け根をゆつくりとくすぐるようにさする。

「……はあはあ」

快感でそれどころではないのか、みなもからの返事は返ってこない。ただ自分のスカートの中に入っているりのの白い手を小さく悩ましげな吐息を吐きながら目で追うことしかしていなかった。

「みなもちゃんのこと、かわいいね」

全く抵抗しないみなもにりのも先ほどのお返しとばかりにまだ薄い産毛しか生えていない秘部をいじり始めた。先ほどから焦らされ続けたみなもの秘部は熱を帯びながらりのの指を湿らせた。

「……りのの……そんなに変わんないじゃない！」

「でも私の方がおっぱいおっきいもん♪」

息を殺しながらみなもは反撃するが、スカートの生地が湿気を吸って色が変わってくるくらいに股間は濡れそぼっていた。

りのもだんだん乗り気になってきたのかまるでキスをするように顔を近づけ舌でみなもの太腿と秘部を直接刺激し始めた。

「……そんなの……すぐに……追い越すん……くう……やん……」

静かな教室で淫靡な吐息と水音だけが響いていた。



二人の吐息はどんどん激しくなり、お互いの胸の突起物も痛いほどにとがっている。

どちらからだだったか二人はお互いに向き合って体を擦り付けていた。唇から唇への唾液交換……。

痛いほど自己主張を始めている胸をお互いにこするとまるで電気が流れるようにしびれていく……。

くちゆくちゅとお互いの秘部をこすって流れるさつきよりももっと淫靡な音。

お互いの体温が融合するような感覚と限界はおのずと近づいていた。

「ごめんごめん☆待ったあ?」

人気の無い筈の教室に響いたドアの音でその行為の恥ずかしさと驚きで二人の心臓は止まりそうになった。

「お、やってるね。二人とも」

裸でお互いを隠すようにちよつと不安な顔で抱き合ってる二人を笑いながら少女はドアをまた閉めた。

「ふえくん、びっくりしたよお」

りのが泣きそうな声で言った。

「ごめんごめん、遅れちゃった☆」

舌をちよつと出しながらあゆは服を脱ぎ始めた。

「うわあ、りの、びっくりした」とか言ってたけどもう準備万端っで感じだね♪」

二人の体にはまだほてりが残っているのか、体はまだ薄いピンク色に染まっていた。

二人の足元にはまるで粗相をしてしまったかのように濡れている。「あれえ、二人とも、もしかして今のでイツちやったのかな?」

あゆはゆっくりとりのを自分のところに引き寄せた。

「そ、そんなことないよ!」

あゆちゃんの手が私の体を撫で回してたと思ったら、女の子の力とは思えない力で傍に引き寄せられた。あゆちゃんには内緒だけどあゆちゃんの言ってた通りイツちやったばっかの私にあゆちゃんのうちよつと冷たい手は震えちやうほど気持ちよかった。

「あれ?あれれれ?じゃあ、それなのにしてるんだ♪りのったらエッチね☆」

「えっちなんかじゃないもん」

クスクスと意地悪な笑いも浮かべながら、あゆちゃんの手は私の敏感なところをいぢり続ける。さつきまではみなもちゃんと一緒だった恥ずかしくなかったのに、今は教室内に響く水音がとても恥ずかしい。

「ひやあ、あゆちゃ……うく……くう」



やめてほしいのか、もつとして欲しいのか判らないけど何か言葉を伝えようとするのに頭が真っ白になって何も考えられない。

「正直に言わないともつと恥ずかしいことしちゃうぞ」

そう言っ私はあゆちゃんにキスをされた。あゆちゃんはすぐに舌を絡ませてきて、私も必死に絡ませるけど唾液が口から外に出て白い糸引いて肌に垂れてえっちに光る。



「じゃあ、りのはここでおしまい☆」

「ええ！あ、あゆちゃん、なんで……？」

あゆちゃんと唇を離すと光る唾液の糸を引いて、またほてり始めた体に垂れた。

「だって、りの正直に言わないし、みなもがかわいそうじゃない」

そう言っであゆちゃんはみなもちゃんの顔を自分のところに寄せた。みなもちゃんは私達を見て興奮したのか、自分でアソコをいじっていた。目は焦点が合っていないようにも見える。

「おいで、みなも」

「……うん」

みなもちゃんは待ちきれなかったのか、そのままあゆちゃんに自分からキスをしてあゆちゃんの腕を自分の太腿の付け根に添えた。そこはもう洪水みたいにキラキラと濡れているのがわかった。

「ん……うん」

「みなもはりのと違って可愛いね、いじり甲斐があるよ」

あゆちゃんは手をあてがわれているところをわざと音が聞こえるように激しくいじくっていた。とってもうらやましかった。

唾液の交わる音と、赤い顔で目をつぶりながら必死であゆちゃんとキスをしているみなもちゃんがとってもえっちに見える。

みなもちゃんとあゆちゃんの絡みを見てたら、私は無意識のうちに手をアソコとおっぱいに当てていた。

「あゆちゃあん、私も……イきたいよお」

「どうして欲しいの？りの、今度は正直に言える？」

「えつと……えつとお……」

恥ずかしさなんかよりもっと気持ちよくなりたかった。えっちなところをこすって舐めて欲しかったから……。

「みなもちゃんと一緒に私のえっちに濡れてるおっぱいとアソコをいっばいいちって……下さる」

「よくできました♪ ……りの、おいで」



「む、りのはもつと我慢しなさいよ」

みなもちゃんがまたちよつと頬を膨らましたけど、私にキスをしてくれた。

「さつきよりびしょびしょだ……りのつたら本当にだらしないなあ」

「みなももね」

そう言っであゆちゃんの手がみなもちゃんの大事なところで私に負けないくらいえっちな音を立てる。何度も気持ちよくなつちやつて、みなもちゃんも私も何も考えられなくなっていった。

「あゆちゃあん、みなもちゃあん……私……もう、イッちゃうよお」

「りのおお、私も、もうダメえ……」

「みんなでイッちゃおうか♪」

あゆちゃんが優しく私とみなもちゃんの大事なところの口をつけた。その後は私は何にも考えられなくなった。



「以上が昨日の教室で起こっていた顛末です。私の報告ではこれが限界ですが、実証としてビデオもあります」

淡々と非日常的な官能劇を語るもう一人の隠密、その各自の声色と感情を見事に演じての報告である。静かに聞いていた面々は顔を赤くして聞く者もいれば、あまりの事に言葉を失う者もいた。

報告していた琴葉でさえこっそりと太腿をすり合わせている。

「りのもみなも私達に隠れてそんなことを……」

持っていたそろばんをそのままに頭を抱えるまゆら。

「やりますわね、三人とも。まあ、恋愛は自由ですし……ね」

「三人とも若いですね。あ、後でそのビデオは私にこっそり渡してくださいね」

指を口に当てながら微笑してる久遠に、楽しそうに腕を合わせながら満面の笑みを浮かべている聖奈。

「いまはそんなことを言ってる場合じゃないだろ！」

「……………」

三人の行為に顔を赤らめながら反論する奈々穂に、同じく顔を赤らめているシンディ。

他の遊撃メンバーは業務の為ここにはいないが、他の主要メンバーは結果を聞いた形になる。勿論、最高責任者である生徒会長の奏もこの場にいた。

誰も奏の言葉に耳を傾ける。

「そうね……ちよつと、お仕置が必要かしら？」

にこやかに言う会長だが、そこにいたみんなは何故か背中に寒さを感じた。

一人を除いて。

「そうですねえ、ちよつとやり過ぎかもしれないですね。うちのみなもちゃんも体も強くないですし」

聖奈の笑顔は先ほどよりも輝いていた。さりげなく手には既にビデオテープが握られていた。

「りの、桜梅さんは？」

放課後にみなもちゃんが走って私のところまでやってきた。

「あゆちゃん、隠密の仕事が出来たからしばらく帰ってこれないかも……って会長が」

「ええ？それじゃあ修行はあ」

「うん、しばらく出来ないね……」

みなもは今にも爆発しそうなくらいほっぺに空気を含んでいる。

「秘密の修行が出来ないなんて」

「あ、そういえば聖奈先輩が放課後、そのまま生徒会室に来るようになって」

「えええ！」

みなもはスカートの裾を両手で押さえながら驚いた。

「みなもちゃん……また……？」

りのは苦笑いを浮かべてしまった。

「うるさいわね、修行は続けないと意味がないの！」

「そういえば会長さんもりのに放課後、生徒会室に来るようになって」

「ひゃあ！」

私も思わずスカートの裾を両手で押さえってしまった。

「あれえ？もしかしてりのも……？」

「だって、あゆちゃんがやらないともう遊ばないって。バ……バレちゃったりしないよね……？」

「多分大丈夫でしょ？りののったら相変わらずダメねえ」

二人は後ろと前を手で押さえながら生徒会室に向かうのだった。



スール
妹たちをいぢられて
内心穏やかではない
お姉さま方の
ハチミツ放課後授業

END



極上生徒会の小説は書きにくいですねえ。
今回は時間も無いのに**無理矢理**(強調)
書かされ… 書いたので、誤字脱字と内容のチェックが
甘いです。勘弁してあげてください。
HPでも極上の**ノーマル**(ここも強調)小説をアップ
出来たらいいなあと思っています。

この度は稚拙な文章なんぞ書いて
すいません。と先に謝っておく。

アースライト管理人 BAMIなのでした〜。



HELLOでニーハオでこんにちは、のKしむらです。
今回は久遠×琴葉のお約束な組み合わせです。

次はランス×和泉とか、あゆちゃんの話とか、りの話とか描きたい
なあと思ってるのは内緒の話。

最後に、この本を手にとって
頂き、ありがとうございます。

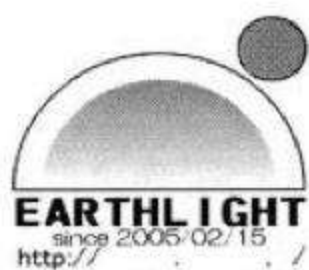


しむら
2006. APR



極上性奴会

ごくじょうせいどかい



タイトル：極上性奴会
発行日：2006 / 04 / 23
発行者：アースライト
HP：http://
印刷所：POPLSさま

代表者
好月四季
執筆者
BAMI (管理人)
にしむらたかし

SPECIAL THANKS
国土

感想、意見、問い合わせはHPまでお願いいたします。
本誌内容の無断複製、転載を禁じます。
18歳未満の方への販売、配布を禁じます。

特別だね。



その普通、

THE 歩DOLM@STER



PRESENTED BY EARTHLIGHT